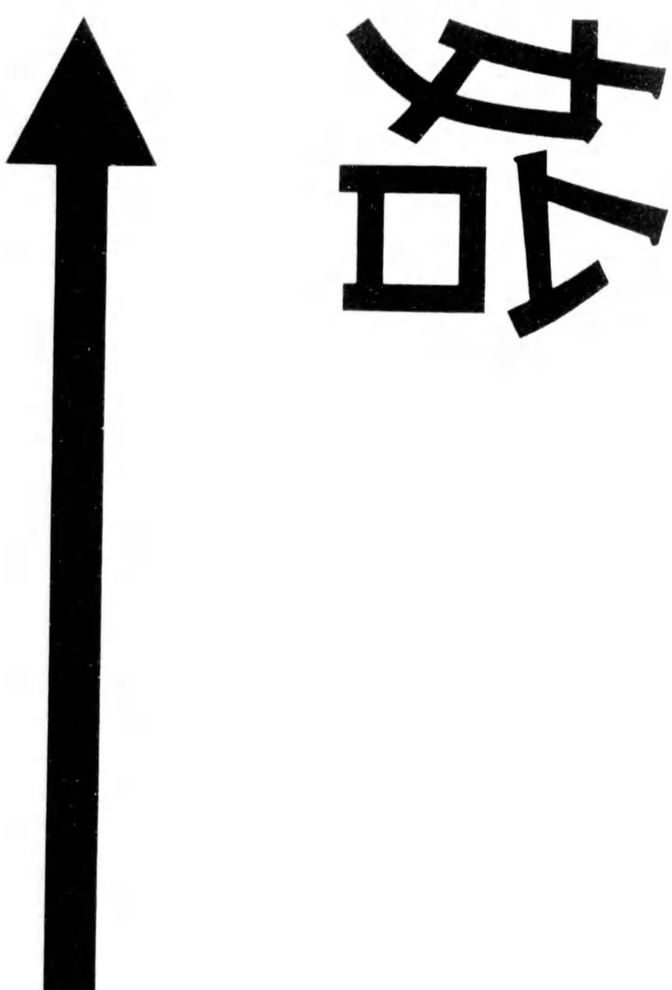
K. KABASHIMA



特100
299

序

凡そ世の學者實業家政事家等たるを問はず、其名の世間に知れ渡りて國家必要の材となる頃には、早や既に兩鬢霜を帶ぶる者多く、或は老眼白髮の人も尠少ならざるを常とするに、獨り飛行家は此のレコードを破るもの甚だ多し。先般來朝せしナイルス氏の如き、年齡未だ三十に達せずして既に世界的飛行偉人の中に入れり。特に本書の主人公たるアート・スミス氏は弱冠の時既に『空中の新王』と呼ばれ、今年僅か二十二歲に過ぎざるに坤輿の到處より『空中の巨人』『空間の藝術王』などゝ賞嘆されて世界的名士の主班に列せり。

斯の如くスミス氏が當代に異例の盛名を博したるもの固より其技の

5—(3.)28

玄妙に入りたるに由ると雖も、亦一面より之れを考ふれば、輓近飛行機其ものが、空中文明の發展上唯一必要のものたることを世人に確認せられたる結果なりと謂ふことを得べし。

飛行機が初めて跟々の歩を移せしは明治三十九年にして僅かに二丁餘に過ぎざりしに、今日に於ては一時間百餘哩、連續航行四、五十時間。二百乃至二百五十馬力のモーター四箇を備へ、速射砲四門、機關銃二乃至四座を据え、乘組員十二人と云ふ恰も軍艦に翼を附けて空中を翺翔せしむると同樣の偉觀を呈したるに、加之も是れはホンノ初歩にして今日以後の進歩は何れの點に迄到達するか到底豫測すべからずと云へば、近き將來に於て國防上恐るべきものは大砲小銃に非らず、超ド級戰鬪艦にもあらず、實に航空機其ものなりと謂ふ時節に逢着す

ること必然なりとは、歐米學者間の定論なり。

右に述べたるが如く重要なる空間文明の開拓が年少氣鋭の人に依りて獨り其效を速かにするに於て、又國防の要素が陸と海とのみならずして、空其ものに重きを置かざるべからざる今日以後に於て經世者愛國家及他日の國家を双肩に負擔すべき青年者が最も思を致すべきは夫れ飛行機に在らむ歟。深く熟考を望む所なり。

本書中人生の弱點として時々艶麗の文字無きに非らず、讀者請ふ其華を採らずしてスミスが孝養心と其苦心成功の跡を究められんこと希望の至りに堪えず。

大正五年三月

國民飛行會々長　陸軍中將　長岡外史

はしがき

世の中に、飛行家といふものが生れて以來、僕は未だ嘗てアート・スミス君位、興味のある飛行家を見た事がない。單に十五歳の少年から、飛行機乘りになつたのが面白いと言ふ許りでなく、其生涯に於てスミス君程華やかな情話を有つた飛行家は、未だ嘗て一人も無い。スミス君の過去の生涯は、之れ悉く小説であり、又小説以上の實際的演劇である。而して又稀れに見る孝子譚であるのだ。過去のみならず君の將來は何時までも然うであらう。

スミス君の傳を讀んで、泣かざるものは人でなく、聽いて發奮せざるものは國家に益なき動物である。殊に、吾々は世の少年諸君に對つて、スミス君の如き價値ある少年成功者の、其健げなる志と、不撓なる努力とを諭へたいと思ふ。こは決して假想的の物語でもなければ、架空的の冒險小説でも何んでも無い。事は一つ〳〵貴ぶべき諸君の教訓であると信ずるからである。

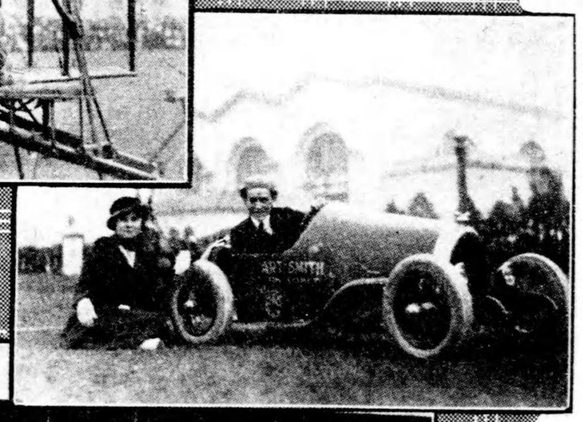
尊敬すべきスミス君の來朝に際し、急遽この書を作して聊か驩迎の意を表したいと思ふ。

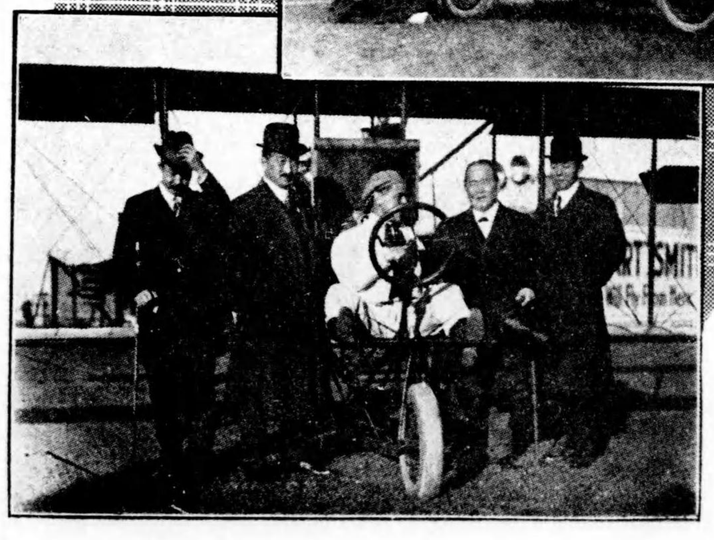
大正五年三月

編者

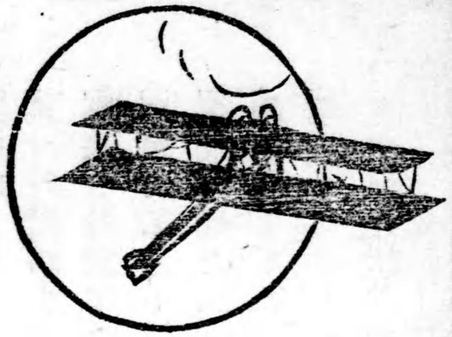
アート・スミス物語目次

■十五歳で立派な飛行家……（一）
■或夏の天幕旅行中の事……（四）
■主の爲めなら命までも……（八）
■飛行家でなければ駄目……（一二）
■生き殘つた一人息子だ……（一七）
■三千五百十三圓二十錢……（二一）
■海よりも深き親の恩惠……（二七）
■アット言はせて見せるッ……（三一）
■今日が運命の決する日……（三六）
■胸が張り裂ける程殘念……（四一）
■悲しむべき二つの事件……（四五）
■泣きたい程嬉しい友情……（五〇）
■漸く成功の曙光を認む……（五四）
■此町の誇りであります……（六四）
■初めて興業飛行の契約……（六九）
■觀衆の不平は潮の如く……（七五）
■禍福は綯へる繩の如し……（八一）
■野外横斷大飛行に成功……（八六）
■最も得意な少年飛行家……（九一）
■戀人エミー嬢と初同乘……（九六）
■飛行機でエミーと遁走……（一〇一）
■墜落して結婚を許さる……（一〇六）
■堂々たる初回宙返飛行……（一一一）
■勿驚連續逆轉二十二回……（一一四）





（上圖）愛用機（カーチツス型復葉）とスミス君（中圖）スミス君と夫人エミーさん自働車は競走用に使ふのです。スミス君は自働車の操縦にかけても天晴名手であります（下圖）スミス君と盛裝男（祝唱して二コ〳〵せるが男爵、寫眞は葵巷に於て撮影せるものなり）



スミス氏……

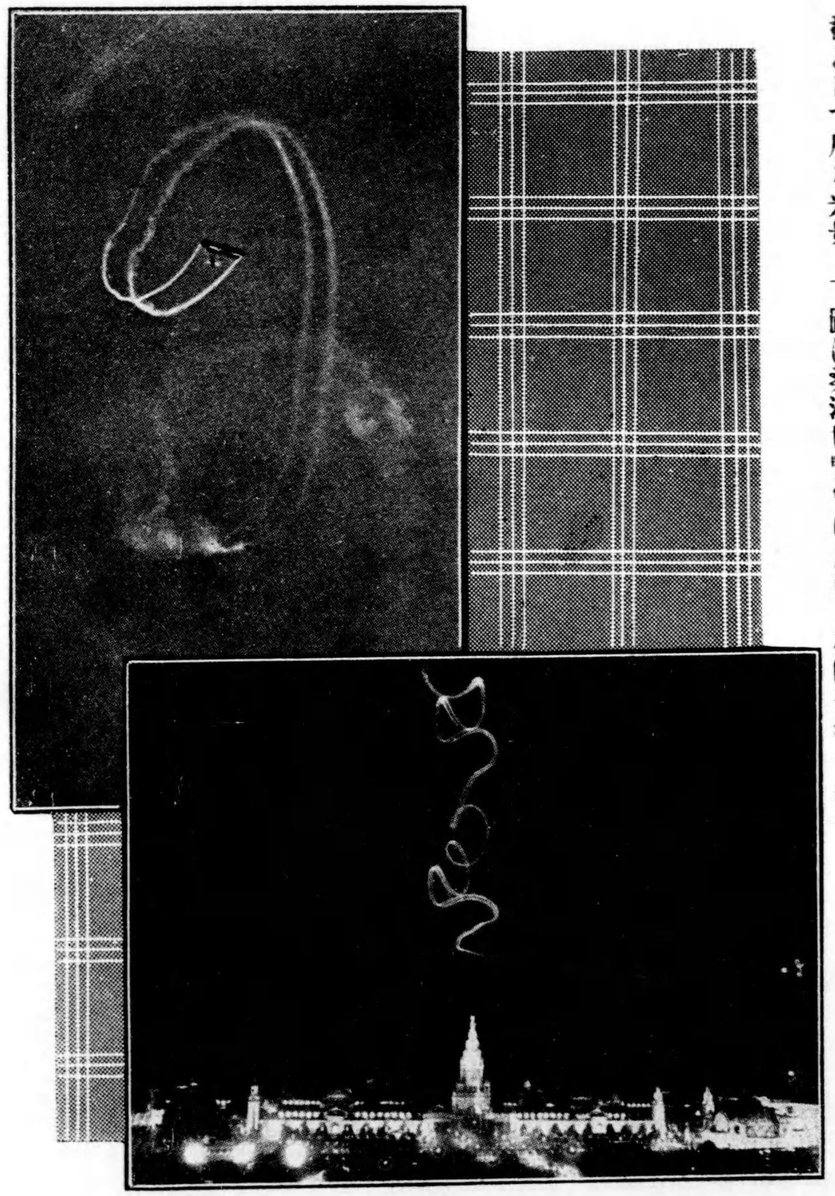
東洋の天空を飛翔
妙技を振ひて
驚嘆せしむれば

ヒコーキ印學生帽は

學生間の人氣を集中し
賣行飛ぶが如く
益々其の權威を示す

全國到る處の洋物雜貨店にあり御買求の節はヒコーキ印と御指命を乞ふ

發賣元
東京
合名會社 長郷商店



スミス君が夜間電氣花火仕掛で美しい曲飛行をするのは名高い事實ですが書間も夜同様の仕掛を以て大空に文字を印する妙技も得意とします上圖は即ち白晝蒼天に印字に掛らむとして居る光景、下圖は桑港博覽會に於ける夜間飛行の壯觀。

スミス物語

國民飛行會編

十五歳で立派な飛行家

アート・スミス君は、十五歳で最う立派な飛行家であつたといふ。何う考へても、吾々の頭腦では嘘だとしか想はれない。けれども、其れは飽くまで事實だから致方ない。それが又何うして人間の子であらう。天才といふものは、斯うも偉い才能を以て此世に生れて來るものであらうかしらと怪まれる。

凡そ世の中の如何なる事業でも、事業と名のつくもので、十五歳や

二十歳で立派に其目的を果たしたものが一つとして他に有らうか、二十歳前後の青年で、名を一世に發揚し、全世界を擧げて賞讃せしむる程の青年の事績が歴史に現はれて居るであらうか。譬へ何れ程近世進歩した科學の賜が多いとしても、此の弱年飛行家として赫々たる聲望を世界に馳せたアート・スミス君のやうな人は、過去には勿論、此の先幾百年の後と雖も決して多く見る事は出來まい。斯う云ふ人こそ眞に飛行界の麒麟兒と稱すべきであらう。

スミス君は今歳は恰度二十二歳である。飛行家になつてから、もう六年許りの星霜を經て來て居る。其間の飛行の經驗を物語り、驚嘆すべき此の弱年飛行家の事績を述べる事は、此れを種々な方面から觀察

して、際涯ない興味が湧いて來る。スミス君は今言ふ通り天才であるには相違ないが、又其人自身から言はせれば『世の中に俺ほど苦勞したものはない』といふに違ひない。

北米合衆國の中部、インデアナ州フオート・ウエーンといふ田舍街の土木請負師の四番目の息子として生れたスミス君が、始めて飛行家にならうと決心して、親爺の仕事の手傳へを全然止めて了ひ、一週間五弗の給料を棒に振つて固い〳〵決心を決めた時でも、スミス君の幼な友達は、

『あいつは氣狂じみた考を持つた馬鹿野郎だ』

と口を揃へて嗤つて居た　又實際十五歳の腕白盛りの子供には、建築

師の事務所へ通つて、親爺の手傳をする位が好い仕事であるに違ひない。人も屹度スミス君の飛行家志願などが出來る事でないと信じて居た。けれども中には、

『彼の小僧は宛でブルドッグの樣な頑固な忍耐力を有つて居る』

と言つて居た人もあつた。『ブルドッグの如うな少年といふ』此の言葉の中から、スミス君自身も幾分かの善意味を見附け出して、自ら慰めて居つたといふから、生れつき餘つ程意地つ張りな子供である事が、此一事を見てもわかる。

或夏の天幕旅行中の事

スミス君の飛行家としての天才肌を知らうと思つたら、其抑もくの第一回逆轉飛行を演つた時の樣子を見れば解るが、それはもうスミス君が十分な過去の苦しい經驗を嘗めて來た後の事だ。唯だスミス君の他人と著しく違つて居る所は、金もなく敎師もなく、他の飛行機の實物を見た事すらもなく、素天邊から自分の力で作り上げた飛行機を飛ばして、而かも立派な飛行に成功し、其れで又直ちに宙返りに成功したといふ事は、何れ程スミス君が『自分』と言ふものを深く信じて居るかといふ事を知る事が出來る。それは必ず飛行家として、凡人の企及し難い智能を有つて居たには相違ないが『俺にも出來る』と信じた事を、スミス君は大膽に行つたに過ぎないのだ。

スミス君の成功は、常に此の強い自信力によつて貫徹されて居るものであるが、又更らに其事業を助けた大きな力が他に二つあることを忘れてはならぬ。それはスミス君の兩親と、其戀人のエミー嬢である。エミー嬢とは言ふ迄もなく、スミス君の最愛の妻となられた人である——最近離別せる噂有り——スミス君は常に自分の今迄爲し得た所の事業は、皆な此のエミーの賜であるとまで言つて居る。安全なる飛行の原理を實際に實行し、宙返りの必ず出來るものだといふ自分の信念を實際に敢行したのも、皆なエミーの鼓舞によるものだと言つて居る。

始めてスミス君が飛行家志願を決心をした當時を追想すると、今から恰度七年前の事だ。スミス君が十五歳の時の或る夏の日、自分の母

と、親友のアルと、アルの友人の少女エミーと、總勢五人許りでフオート・ウエーンから、ジエームス湖へ二週間の天幕旅行をした事がある。エミー嬢は自分よりは一つ歳下の十四歳で、可愛い盛りの少女であつた。

スミス君も遉がに子供ではあり、エミー嬢に逢ふまでは女といふものに就いて、別に何等の興味をも有つて居なかつた。好きなものと言へば滑走遊戯や例のヴフアロー・ビルの曲馬などいふ遊びや、さうでなければ機械學——それを應用して種々な動くものを製作する事が唯一の快樂であつた。自分の街で始めてペタルを踏む車を走らしたり、納屋一杯の大きな紙鳶を作つたり、落下傘を着けて見たり、或時は電

氣の實驗を行つて、電線を通じたミルク皿を猫に與へて驚かしたりして無暗と悅んで居た。若い女などいふものは、概ね斯麼スミス君の悅んで居るやうな事は好まないものだ。スミス君のエミー嬢とは斯うして、互に興味の違つて居る時分に相逢つて、不思議にも二人は互に戀も知らざる戀に落ちたものか、他所目も羨やむほど仲好しの友達になつたのであつた。

■主の爲めなら命までも■

エミー嬢は赧顏の小柄な娘で、非常に負け厭ひで、男の兒にはいゝ遊び友達であつた。スミス君とは不思議に氣が合つて、後にスミス君

が飛行研究を始めてからも、凡ての人がスミス君の不成功を極說しても、エミー嬢は其等の人に耳をかさず、スミス君が大變困り切つて繼樓の服を着て他人から借りて來る十仙、二十仙の鐚錢で辛つと生活して居た時分でも、エミー嬢は常にスミス君の味方となつて種々と勇氣を付けて居た。

嬢はフオート・ウエーンの街では一番愛くるしい娘として、誰人からも持はやされて居たが、スミス君の爲めには、遂々嬢自身までが、世間から批難の的にされるやうになつたりした。嬢は遂に父を捨て、家族を捨て、凡ての友達を捨てゝまでも、常に變りなくスミス君の爲めに命を懸けても援助をしてくれた。けれども之れ等は皆んな後日に

起つた事で、何んと言つても此時分は未だあどけない少女であつた。

ジエームス湖に遊んで居た時分、或日黄昏れ時に、スミス君とエミー嬢と、一つの短艇にのつて湖上に漕ぎ出た。エミー嬢は艫の方に腰をかけ、スミス君は艇底に寢轉んで夕燒の空を眺めて居ると、一羽の角鷹が、さも心持好ささうに、少しもその翼を動かさずに、悠々と輪を描きながら飛んで居た。スミス君は何うして其れが飛ぶのか解らなかつたが、不圖自分が遂近頃何かで讀んだライト兄弟の飛行の事を胸に浮べた。果して飛べるものなら、又果して其れが何れ程愉快なものであらう。とまれ空氣より重い機體を如何にして空中に浮べるものかしらと、切りに飛行の原理について思ひ耽つた。其時エミー嬢が何か

二言三言饒舌つた事も、スミス君の頭には入らなかつた。

『何を考へて入らつしやるの私の言ふ事は大抵上の空で聞いて居るのでせう』

と言つて、其時エミー嬢が怒つたりなどした。

『僕はどうして空中飛行が出來るのか、飛行機といふものを作つて見たいと考へて居るのです』

と言つた時に、エミー嬢は其應答の奇拔なのに驚かされた。

『今どうして好いか解らないが、僕は屹度やつて見るつもりです』

と更らに附加へた時には、エミー嬢はスミス君の性質を日頃から知つて居るし、反對するどころか、笑ひもせずに、

『貴君がやると仰るなら出來ませう』と言つた。

其後フオート・ウエーンの街へ還つて來てから、スミス君は熱心に飛行機に關する新聞雜誌の記事を蒐めることに骨を折つたが、それ等の研究材料は至つて貧弱なものであつたが、スミス君は仕事の暇にも時間を惜んで熱心に其原理の研究を始めたのであつたが、家が貧乏なため、親爺の仕事を助ける事が忙しく、學校も其の前の年から退學して居たのだつた。

飛行家でなければ駄目

スミス君の父といふ人は、前にも云つた通り土木請負師で、沈着な至つて靜かで、そして一種沈默の力を有つて居た。既に之れまで十七年間も一つの事を働いて、漸く本望に向つて進んで行けるやうになつたが、又更らに大きな事業を企て、昨今漸く其事業の成功の曙光が見えかゝつて來た時に、不幸にしてだん〳〵盲目になり掛つて居た。其れは彼が大工の助手をして居た時、餘り激しく働いた爲めに、日射病に罹つたのが眼疾にかゝる原因であつたのだ。

氣丈夫な父は、眼が惡くなつて行くことを、人に言ふ事すらも好まない、自分獨りで、無理に見ようと氣を焦々させる所は、側から見ても氣の毒に堪えない程であつたが、日を經るに從つて、視力は次第に

減退し、それが爲めに一家の糊口を聯ぐべき事業の方も、追々と不振になり、いゝ契約は次第に他人の手に落ちて了ふのであつた。

幼いスミス君の胸中は、果して何奈に辛かつたであらう。ジエームス湖に旅行した前年から、學校も退學て、專ら親爺の仕事の手傳をして居つたのであるが、自分の稼ぎ高とても一週間に僅か五弗しかない。その中に親爺の收入は夥しく減つて來て、自分等家族の財產といへば先づ自分等が現在住んで居る家ばかりだ。其家さへも今では維持出來るか何うか怪しくなつて來て居る。何んな人でも貧乏には勝てぬ。スミス君も幼ない頭腦の中で、絕えず生活難の苦い經驗をなめながら、如何にして此の家族の貧を救ひ、父の眼病を治す事が出來るかと、常

に思ひ惱んで居た。

自分が目的通りに、立派に飛行家になりさへすれば、其處にはサイエンテフイツク・アメリカンの懸賞、シエブラーの懸賞其他全部で約二十萬圓の賞金が飛行界に提出されて居るのだ。十五歲の幼ない少年の頭には、譬へ其中の最少額の賞金でも、自分の心には大金滿家になつたやうな氣持ちにもなれ、且つ又父の眼病を救ふ事も出來る。飛行家でなければ駄目だと、深い固い決心を決めつゝも、未だ嘗て兩親に其胸中を語るべき機會がなかつた。

親の心を知るものは子供であり、子供の心を知るものは親であつてスミス君が斯うして物思ひに耽つて居るのを、兩親も薄々其理由を知

つて居た。貧乏人の子に生れたスミスは、世にも可愛さうな子供だと、兩親の心の中には絶えず考へられて居たに相違ない。それでも、或晩食事を濟ました後に、食卓を挾んで父とスミス君と相對つて居た時に、

『アートや、今夜はロビンソンの契約の調べをして終ふぢやないか』

と父が言つた時に、スミス君は唯だ今まで、深く思ひ耽つて來た飛行機の事から、急にそれと何にも關係のない仕事に就て語り出す事が出來なくなつて、父の言葉には何も關係のない返辭をした。

『お父さん、僕は飛行家にならうと思ふのです——』

父はスミス君の此言葉を聽いて、內心非常に驚いたには違ひないが、それでも決して其驚きを顏には出さなかつた。

生き殘つた一人息子だ

スミス君の父は、スミス君が飛行家になりたいと言ひ出した言葉に對して、暫らくは無言で居た。父も屹度スミス君が斯麼事を言ひ出すからには、餘程固い決心をして居るのであらうし、又其の目的が何んであるかといふ事に就ても、十分想像が出來た。我がスミスは世間にも稀れな親孝行な子供だといふ事も、父はよく〳〵知つて居た。

『飛行家になる？　——一體何う云ふ理由で？』

と一言質問された時に、もうスミス君の胸は一杯に張裂けんばかりに體中の血液が俄かに大速力で循環し始めたかのやうに、氣は裂り詰

めて居るが、何しろ十五歳の少年としては、飛行家志願の理由を、父の前で滔々と説明する事は迚も出來ない事であつた。

夫れでも、日頃の父の性質として、其れが何奈動機であるか、聽かずに濟まさなかつた。稍々暫らくの間二人は食卓を挾んで、よもやまの話をした。スミス君は其時始めて父の前で、ライト兄弟の飛行事業の事やら、其他いろ〳〵雜誌などで散見した飛行機の知識を悉皆り曝け出して、そして自分の固い決心を父に告げたのであつた。

其處へ恰度母も臺所の方から這入つて來た。父が、

『アートは飛行家になりたいとさ』

と言つた時に、母は、

『飛行家?! 眞個に! ——大變危ない仕事ぢやないかね』

と云つて驚かれた。母としては又夫れが當然の驚きであらう。何しろスミス君は、此兩親にとつて、四番目の息子であつても、年上の三人は皆んな夭折して了つて、今では自分ばかり生き殘つた一人息子だ。自分獨りの考で、此年老いた兩親は更らに一層の苦境に陷るかも知れず、又非常な幸福な餘生が送れるかも知れぬ。兩親が自分の行動に附いて、種々な取越苦勞をするのも無理はない事だ。

スミス君の母は、父にも劣らぬ精力家で、頗る敏捷な又神經家であつた。未だ嘗て彼女が怠けて居た例がなく、行り始めた事は、何處までも行り通すといふ氣質であつた。常に家を綺麗にし大きな庭の手入

れをしたり、家事萬端を切り廻はす外に、教會の澤山の仕事をしたり婦人扶助會の會長までもやつて居た。スミス君が短艇を作つたり、紙鳶を拵へたりする時などにも、母はよく手傳つたりした。飛行家といふ危險な事業に從事する事を此の可憐な子供に勸める心にはなれなかつたのであるが、スミス君は、飛行機は注意してやり、氣流がよく、機體が堅牢であれば決して危險な物ぢやないと言ふ事を極說した。

『飛行機はいくら位で出來るんだ』

と唐突に訊かれた時には、スミス君も遉がに其場でいくら位と正確な計算が出來なかつた。

『二十萬圓の懸賞金？　否や其麼事を聽くんじやない、機械が何れ程

の、費用で出來るかといふんだ。それが正確に分つて計算が立つた時に又相談しよう』

と云つて父は食卓から立つて往つた。

三千五百十三圓二十錢

五六日經つてから、スミス君は漸く飛行機建造費の豫算を編み出した。其れは全部で三千五百十三圓二十錢といふ金高であつた。之れを聽いた時に、スミス君の父は唯だ、

『然うか——』

と言つて肯かれた許りで、何とも返事をしなかつた。スミス君は、

『この家を抵當にしたら、夫れ位の金は出來るでせう』

と言つた時に、父は

『ウム、出來るだらう』

と言つた儘、我が子に顏をそむけて、ハラ〳〵と老いの涙をこぼされた。隨分親不孝な言を云つて了つたなとは思つたが、其れから暫らくスミス君も感慨胸に逼つて、何とも言ふ事が出來なかつた。

其後も、飛行機に熱心になればなる程、スミス君は費用の調達に就て、父に相談する事が出來ないやうに思はれた。仕事が無くなつて、貧乏にいとゞ困らせられて居る上に、此世に一人と頼む父の眼病は追々に重くなつて行く。斯う云ふ苦しい場合にあるスミス君が、如何に

大膽であつても、此上父に金の心配をさせる事は、到底出來ることでないと思つて居る。一度びは自分の口から言出した事——この家を抵當に入れることなども、それ以上を言ふべき勇氣が無くなつて來た。

といふて三千六百圓といふ大金を何うして、自分の力で獲られる事であらうか。一週間に五弗位の僅かな給料を貯めて行つた所で、其れで、目的を遂行する迄に、何れ程長い歳月を要するかといふ事も知つて居る。寧そ其れ位の金を纏めて貸して呉れる人は無いかしら、然う云ふ金持に何うしたら近ける事が出來るものかと、夜半床に就いた儘、瞶と燈をみつめて物思ひに夜を徹した事も決して一度や二度ではなかつた。

其時分スミス君は、仕事の合間〳〵を利用して、漸く一個の模型飛行機を製作した。それにも父が手傳つて紙鑢をかけてくれたり、翼を張つてくれたりした。スミス君は自分の頭腦にある凡ての飛行の知識と原理とを應用して作つたものだから、

『屹度飛びますよ』

と言つて、或る晩に之れを居間の敷物の上から出發される、とそれは自分等の寢床の上を走つたりして、何時の間にか其翼に相當する空氣を捕へて、フワリと輕く飛び上つて、三尺ばかりの高さで居間の中を飛んで行つた。

『お父さん、屋外で飛ばしませう、お母さんもいらつしやい』

と言つて裏庭に飛出して、トマト圃の間の小徑を走らせてみると、それは美事に地面から一丈許り高く離れて、極めて自然に飛行した。スミス君は其れを捕へようとする間に不幸にも物干綱に打突つて墜落し機體はバラ〳〵に壞れて了つた。

『ねえ、お父さん飛んだでせう』

と得意らしく言ふと、父も母も此頃になく嬉しげに笑つて居た。

飛行機の破片を拾つてから、皆んな家の中へ還つて來た時には、日もとつぷりと暮れて、家の中は隨分暗かつた。

燈を點けたり、臺所の仕事をしたりして、母が忙しげに立働く間にスミス君は椅子に凭れ掛つて居たが、

『お父さんの眼ばつかりがな――』

と獨り言のやうに口に出たのを母が聽いて、

『エー？』

と言つたが、スミス君は、

『若し眞當の飛行機を造つて、其れで飛べるやうになれば、澤山のお金が得られるのです。さうするとお父さんもシカゴへ行つて、良い醫者にかゝる事が出來るんです』

と言つたが、それでも母は未だ飛行の危險を思はない譯には行かなかつた。此頃のやうに、父の眼は日增に惡くなり、定期の收入さへ全く無くなつて了つて、一家の糊口をすら案じられる時に際して、其殘

りの財産を全部幼い十五歳の子供に賭けて、それが而かも飛行機などといふ新しい仕事でもつて、成功の機會を捕へるといふ事は、誰れにして見たところで賴りない話である。

海よりも深き親の恩惠

スミス君許りではない、一家を擧げて憂はしい日は其後暫らくは續いた。

秋も晩れの或る日の夕方、食事の時に父も母も常になく憂鬱らしい面持をして、何んとなく自分等許りでは是非の判斷が出來ないと言つたやうな心配相に兩親の態度が見えた。スミス君は多分醫者が又父の

眼を非常に惡いとでも言つたものか、それとも何事か變事でも起つたのではあるまいかと氣遣ひながら、プデイングを食べて終つて皿を押しやつた時に、母は突然立ち上つて父の側に寄つて、その肩の所へ手を置いた時に、兩親の凛とした視線が一樣にスミス君の顏に注がれたそして父は言つた。

『アートよ、吾が言ふ事を聽け、吾々はお前を固く信賴する事が出來ると思ふ。それで吾々は此家を抵當に入れたから、お前に飛行機を作る金を與へる事が出來る』

此言葉を聽いた時の、スミス君の胸中は何うであつたらう。スミス君は、軈て父が食卓の上に出した三千六百圓の小切手を睹た時に、自

分は始めて人間の眞の勇氣と力とが、體中一杯に漲ぎるのを感じたに相違ない。慈愛深き此の兩親の惠みに對して、スミス君が飛行機に對する燃ゆるが如き勇氣は、何うして胸中に躍らないで居よう。狂せん許りの喜びを感ずると同時に、海よりも深き兩親の恩惠に對して、筋肉が引しまるやうに感じた。

噫、いまスミス君の父は、自分の眼が日增しに惡い時に、その子の爲めに家を抵當にして、十五歲の少年に飛行機研究を行らせるといふのである。親は其子の志の何たるかを知り、其子は親が之れ程までに苦勞をしてくれる心持ちが、自分にとつて何を暗示するかを知つて居たのであつた。

十五歳の少年として、スミス君の無邪氣なる過去の生涯は、遂に此の一瞬間から全く別個の人の如く轉換されたに相違ない。それ以來のスミス君は、決して少年として見るには、餘りに大人びて居つたに違ひない。スミス君が世界人文史上の大奇蹟と稱さるゝ迄に、少年飛行家として、他日赫々たる名聲を博し、偉大なる成功を成し得た元氣は、實に此瞬間に於て萠したものであつた。

スミス君の當初の計劃は、先づ六週間以内に、自分の理想になつた飛行機を建造するといふのであつて、實際組立てに着手する前に、曾て種々の雜誌で見た圖を基本として、幾つかの設計圖を描いて見た。素より機械學や物理學などに就て十分の知識があつた譯でもないが、

唯だ機の各部分を、何十回となく考へ廻らして、多くの自家の獨創に成るものを案出し、之れで必ず飛ぶといふ信念を持つて居たに過ぎぬけれども其處等がスミス君のスミス君たる所で、よく天才肌の才能を發揮して居るものと見られる。

■アット言はせて見せるツー■

愈よ機體建造に着手するに先つて、スミス君は仕事場の窓硝子を眞白く塗つて、決して屋外から覗かれないやうにした。それは何故かと云ふと、スミス君は當初から心中大に誇りとして居る安定機の發明があつた。それを他人から見られるのを避けん爲めであつた。自分はラ

イト兄弟のやうな飛行機を作ると言つて居るが、胸中には大に其れよりも更らに一層進歩した完全なものを作るといふ決心で居たのだ。安定機が完全に證明されゝば、自分は直ちに賞金を得られるのみならず、大に之れによつて世に名聲を博する事が出來ると固く信じて居たスミス君が、今日如何に立派な宙返りを成す事が出來るといふも、固を索ぬると、其飛行研究の出發點からして、終始變らぬ此の安定飛行の眞理を實際に證明して居るものだと言ふ事が出來る。

スミス君が機體の建造を着手する前、其年の秋に、ライト兄弟がインデアナポリスで飛行を行つた。ライト兄弟の複葉飛行機が、其時二百呎ばかりの空を飛んだ。スミス君は忙しい時間を削いて、態ざ〳〵

此飛行を見に行つたが、精密に其機體の構造などを調べる閑もなく、急いで自分の仕事場に歸つて早速其工事を急いだ。

朝飯を食ふにも、之れを呑み込むやうにして時間を急いだが、月日の經つのは早いもので、遂う〳〵初めの計劃の六週間は經過して終つて更らに二個月に繰延べたりして、毎日〳〵働きづめ、寢る時には身心ともに綿の如うに勞れて、床に轉がらない中からグウ〳〵眠るといふ程、それほど熱心に働いた。

友達のアル・ワートマン君も、時々は來て手傳ひをしてくれたし、注文の發動機が屆いた時には、懷かしいエミー孃が久方振りで訪ねて來て呉れた。此の夏中は、エミー孃とも毎日のやうに逢つて居たが、

飛行機の製作を始めてからは、辛つと日曜、日曜に逢ふ位のもの、それも折角訪ねて來てくれるのに、スミス君は之れを十分歡待す程の暇もなかつたが、エミー嬢も決して其れを氣にもしなかつた。

『アートさん、眞當に飛べますか？』

と言つて尋ねたりすると、スミス君は、

『彼のジエームス湖で見た角鷹のやうに飛んで見ます』

と言つた。

斯うして秋も過ぎ冬になり、翌年一月の十七日になつて、漸く飛行機は完全に出來上つた。何處の部分も機體は悉くスミス君の手によつて製作されたものだ。之れに四十馬力、二衝程式のエルドリツヂ式發

動機を附けて、始めてスミス君が思つた通り輕快なカーチス型複葉飛行機が出來上つた。それには翼の上下に、スミス君が唯一の誇りとする發明の安定機が附いてある。當時のスミス君の喜びは、恐らく何れ程であつたらう。それを眞によく知つてくれるものは、兩人の親と、可愛いエミー嬢ばかりであつた。

けれども兩親が、家までも抵當にして調達してくれた三千六百圓の大金も、今は剩すところ僅か四十六圓ばかりになつて居た。スミス君は有らゆる儉約の方法を採つて來て漸く之れ丈けを剩したのであるが、空中を高く飛ぶ時に、體が隨分寒いといふ事を知つて居るので、其中から更らに十六圓を支出して一枚の暖い肌衣を買つた。

そして其晩の眞夜中に、人目を避けて、父と友人のアルと三人して、飛行機を舊野球運動場に搬んで天幕張り格納庫の中へ納め、アルが獨りで夜中之れを見張りして居た。

『見ろ、明日こそ一つフオート・ウエーンの街の上を高く飛んで、世間の愚かな人々をアッと言はせて見せるッ』

と言つてスミス君は、嬉しさに其夜は碌々眠れなかつた。

■今日が運命の決する日■

遂に其日は來た。空も麗らかに晴れて、朝から何んとなく氣も爽やかである。地面には未だ一二寸の雪が殘つて居て、遠い北のミシガン

湖の水面を渡つて來た風が、可成り寒く感じた。

懷かしいエミー孃も、早々と朝飯前から訪ねて來てくれた。母の心盡しの料理が、非常に澤山食卓の上に並べられた。子供が十人かゝつても食ひ切れぬ程いろ〳〵多くの御馳走が出た。母はエミー孃にも一緒に朝飯を食べるやうにすゝめたりした。

之れが愈よ自分等の運命を決定する日であるかと思へば、スミス君の頭腦は非常に興奮して居る。それで折角の御馳走も、十分食べる事が出來ず、そこ〳〵にして出掛けた。今日の飛行の事を豫め考ふるにつけても、スミス君は、指の先が震へる程昂奮して居た。自分は之れによつて安定機の特許も取らねばならず、少くとも二つ以上の賞金

を得て、先づ第一番に父を亞米利加一等の名醫にかけて其眼を治し、借金も拂ひ、更らに金滿家となり、大に有名なる飛行家にならねばならぬと考へて、其責任の大きいことを思ふと、スミス君は決して無謀な冒險をしてはならぬと熟々考へた。

運動場へ來て見ると、前後から見張りしてくれたアル・ワートマン君とウイル・ビータース君、其他二三の子供が集まつて居た。特許を取らぬ中に、誰れか自分の飛行機の安定機を覗きはしないかと案じ、此日の第一回飛行は凡て秘密にして置いたのだ。軈て飛行機は引出される。新しい木材や、金具に麗らかな朝日が射して、飛行機は非常に立派であつた。スミス君は自分から機體を一々調べて見た。父も母も

又エミーも凝つと默つて見て居た。

『アート、機械の具合はいゝか、初めから餘り高く飛ばぬがいゝよ』

と父が心配らしく言つた。

それから愈よスミス君は機上の人となつて、アルが後ろに廻はつて推進機を廻はすと、發動機は誠に素直に働き出した。そして愈よ機は滑るやうに出發した。十分速力が出て居ると思ふ時分に、ハンドルを引寄せると、機は何時か地面を離れて空中に飛び上つて居る。其瞬間に機上のスミス君は、今こそ眞の飛行を行つて居るのだと思つて、言ひ盡されぬ程の快感を覺えた。ズン〳〵と大きな速力で上昇するので、餘り昇つてはと思つて、直ぐ樣ハンドルを前に押した。すると機

は頗る其操作が鋭敏に感じ、餘り舵が利き過ぎて殆んど垂直に下降狀態に移つた。殆んど地上の雪を掠めんばかりにして又急激の上昇を始め、上りつ、降りつ、全く不自然な飛行を暫らく續け、稍水平にかへつたと思ふ頃、ハンドルの輪を少し廻はしたら、今度はそれも餘り鋭敏に利いて、急速度の半圓を描き、其儘横樣に地上に落下し、遂々スミス君は機から拋り出され、機體は滅茶々々に破壞して了つた。後になつて解つた事だが、此時のスミス君の機體は、昇降舵も方向舵も、其輕い飛行機には餘り多過ぎたのであつた。

驚いたのは父であつた。スミス君が落ちて眼を瞠いた時に父は機體の廻りを手搜りし乍ら、

『アート！　アート！　何うしたアート！』

と繰返し乍ら狂せる如くに叫んだ。

『お父さん、大丈夫です！　發動機も何ともないと思ひます』

と云つて立ち上らうとしたが、然し其時可憐なるスミス君は氣絶して居つた。

■胸が張り裂ける程殘念■

スミス君の悲嘆は、再び此處に繰返さるゝ事になつた。墜落によつて酷く脊中を打つた爲めに、何うしても五週間は病床に呻吟しなければならぬ事になつても、破壞した飛行機は、是非一日も早く改造し

なければならず、家を抵當にして得た金は、今は既に三十圓を剩すのみとなつて居る。抵當の期限とても早や五個月以内に切迫して來て居る。いろ〳〵と思ひ惱んだスミス君は、之れは何うしても事業を急がねばなるまい。でないと自分は彼の懸賞飛行に間に合はぬ事になつて、終ふ。然う考へるとスミス君は、居ても立ても居られぬやうに、氣が焦々して來た、寢て居ながらも、飛行機の設計圖を出して、ジーッと考へて見たりした。

『お前！　もう飛行機の事などを心配しないで。事務所に歸つて働いた方が好くはないか』

といつて、兩親は切りにスミス君の飛行研究を斷念することを勸めた。

『ナーニ、抵當で借りたお金は、もう五箇月許りの期限に押つまつては居るが、その方は吾々がどうにかする。お前は其麼事に心配しなくもいゝ。吾々は此上お前に怪我をさせたくないのだ』

と言つて、父も母もスミス君を傷はつた。

スミス君は考へた。若し此儘になつて、自分が結局飛行機でお金が取れなかつたら何うなるだらう。父の眼は遂に彼儘になつて終ふのかも知れむ。自分は其れが何より心苦しい。子として其れが忍び得られようか。スミス君の決心は更らに以前にも增して堅固なものになつた。死ぬまで行ると決心した。死んで兩親にお謝びするなら致方ない事だ。然う思つて、無理に其翌日起きて了つて、直ぐ樣仕事場に隱れて飛行

機の造り替へを始めた。今度は前の經驗で懲りたので、前部の昇降枕を取除けて了つたものを作らうと考へた。

スミス君が毎日十六時から十八時間も働いて、殆んど狂氣の如くなつて居るのを見て母は心配していろ〳〵滋養物を與へたりした。けれども世間の人は、誰れ一人としてスミス君の仕事を賞めるものはない。自分が之れまで仕事をして居た事務所の主配人ウエザーハツグといふ人までが、俺がいゝ建築技師に仕立てゝやるから飛行機などは止めて終へと言つて、スミス君の仕事を酷くけなした。

スミス君は、斯う云ふ事を聞く毎に、胸が張り裂ける程殘念で堪らなかつた。此頃は何一つ自分を慰めるものが得られない。寧ろ仕事場

に蟄居して居るのが益しであると考へたので、餘り出ても歩かず、懷かしいエミー嬢も、日曜毎に逢ひに行けば屹度待つて居てくれたが、他の子供達が、よくエミー嬢を連れて遠足したり、彼女を會に招待したりして嬉げに遊んで居るのを、此上なく羨やましく考へたりした。

■悲しむべき二つの事件■

所が又しても此處にスミス君にといつて最も悲しむべき二つの事件が起つた。

其れは日頃父も母も自分には何も話さずに心配し切つて居た彼の抵當の事が其の一つであつた。何うやら父は苦しい身を裂くやうな思ひ

をして、その利息だけを支拂つたのであつたが、一日父はスミス君に對つて、

『吾々は此屋敷の地面を、街外れの二つの小さな地面に換へなければならぬ、それは何うしても銀行で承知してくれないからだ――』

と言つた。而うして其取換へた地面には、勿論家も何も建てゝはない。此先き二箇月だけ、スミス君と父とむさ苦しい此仕事場の中に住むことを許された。お母さんばかりは暫らく從妹のアンニーの所へ寄食する事になるだらうといふ事であつたのだ。

餘りの事に、スミスは一言も返事する事が出來ず、先つものは涙ばかりであつた。お母さんは故更の如うに元氣をつけて、

『アンニーの所へ往くのは嬉しい』

などと、氣晴らしらしい事を言つて居たが、スミス君は考へれば考へるほど胸を押へられるやうで、其處にじつとして居れず立ち上り乍ら

『それが吾々の出來得る精一杯の事でせう』

と言つた。或は之れで自然々々と一家が離散するやうな悲運にめぐり逢ふのではあるまいかと考へては、もう悲しくて家の中に居る事も出來ずにあてどもなく、屋外に出て、斯麽時の鬱晴しにと思つて、其足で直ぐエミー嬢を訪問した。

何時よりも更らに一層美しく、エミー嬢は着飾つて居た。そして他の男の子供が三人ばかり遊びに來て、例の如くエミーさんが、皆んな

から、可愛がられて居る。皆んなは一様に自分の顔を蔑視むやうにして見て居た。エミー嬢は三人の子供を殘して、スミス君の手をとつて階段を下りて來て、門の所まで來ると、耳うちして話した。

『アートさん、貴君はもう私の家へ來てはいけません、お父さんが貴君は仕事を持つて居ない男だから、交際してはいけないと言ふのです――』

あゝ、そも何たる悲しい事であらう。スミス君にとつては、世の中に既にエミー嬢ほど自分を知つて居る兒がないと思ひ、嬢も又必ずスミス君を愛して居るのだが、スミス君としては、飛行機以外に何物も自分を慰めて呉れるものはなく、僅つた一人のエミー嬢と懐かしく相逢

ふことが出來るばつかりに、それも研究を續ける張合があるといふもの、此際エミーさんと別れなければならないのは、スミス君にとつては、神の與へた樂園から砂漠に追ひやられるよりも、更らに一層悲しい事であつた。

スミス君の失望は、恐らく誰人もそれを想像する事が出來ない。自分の家庭に於て、最近に起つた喪家の不運を、未だエミーさんは知らないのであらう。そう云ふ悲しい事があることを知つて居たらば、遠がにエミーさんも此上斯んな悲しい宣告をスミス君に告げはしなかつたであらう。

『僕はネ、エミーさん、人が何んと言つても飛行機を飛ばさなければ

なりません――いまに解るでせう』

と、きつぱり言つた。勿論エミー嬢も、それに賛成してくれた。そして兩人は明晩逢ふ事を約束して別れた。お互の愛情は、斯ういふ事が起る毎に、次第〳〵に深くなつていつたのだ。

泣きたい程嬉しい友情

『オー、アート君、いゝ所で逢つた。僕はいま君の所へ行つて來た。抵當の事も悉皆り聞いて來たよ』

といつたのは、スミス君にとつて無二の親友アル君であつた。

スミス君は、エミー嬢と彼女の家の門前で別れてから、今しも吾が

家へ歸る途中、物思ひに沈んで、いま自分は何處を歩いて居るのかも知らずに居た。アル君もスミス君の目下の窮境を一から十まで知つて居て、深く同情して居た。

『君は飛行機を何處までも一人で行る積りか、若し手傳が要るなら、僕は一つ君を出來るだけ助けて見たいと思つて居る――そして今僕は百圓ばかりの貯へがあるから、それを悉皆り費つてもいゝよ』

『――――』

スミス君にとつて、恐らく又此れ程嬉しい事は無かつたであらう。自分は何んと返事したら、其厚意に感謝する言葉になるだらうと考へながら、唯だモジ〳〵して默つて居た。

『然うだ、君の飛行機は屹度飛べるよ、大に一つ行らう』

と言つて力を附けてくれた。

二人は話し乍ら其足でアル君の家に行つて、此の夏一杯スミス君の飛行機研究の援助をすることを、アル君は父の前で誓つて其許可を得た。スミス君はアル君父子の唯ならぬ厚意に謝せん爲めに、只一言

『何時か其金は返すよ』

と言つたが、其れがスミス君が、泣きたい程嬉しい感情を言ひ表した僅つた一つの言葉であつた。

『ナーニ、其麼事は心配しなくても構やしないよ』

とアル君は輕く言つてくれた。アル君の父は、インデアナ州に大きな

葉卷製造場を持つて、佳成り富貴に暮らして居たが、富貴であるとないとを問はず、アル君の此男らしい友情に對して、誰れか感激しないものがあらうぞ。

其翌日から、スミス君とアル君とはヴフアロービルの曲馬場に行つて天幕生活を始めた。明けても暮ても、飛行機の側を離れずに、冷い辨當を食べて同い年の二人の少年が、二つの小さい寢臺を拵へて、鹽肉とパンを料理したり、スチユーを作つたりして、お互に兄弟でも出來ない如うな仲よしの生活を續けた。其時分既にスミス君の父は、やつとの事で不動産の取引で少しばかり金の融通がついて、一度は徒妹アンニーの所へ寄食した母までも召よせて、父と母と二人切りで新し

く家を借りて淋しい煙を立てゝ居た。

曲馬場に生活して居るスミス君は毎日飛行機を引出して稽古に餘念なく、故更らハンドルを結びつけて高く上らぬやうにして地上滑走や三四呎の低空飛行の練習を行つて、盛んに操縦術を習つた。

盲目に近い父は、仕事も全く失つたので、此頃は毎日飛行機の所へ來て、モーターの音を聽いて小首を傾けながら、無事に着陸して來た時などは、父もスミス君等と同じに小供のやうになつて嬉しがつて居た。

漸く成功の曙光を認む

間もなくしてスミス君が、始めて米國飛行界に顔出しすべき時期が來た。それは果からずも自分等の唯一の天地たるフォート・ウエーンの競馬場で飛行會が開催される事になつて、カーチス飛行學校の飛行家が來るといふ事になつた。

スミス君は喜んだ。自分は居ながらにして米國飛行界の權威たるカーチス飛行學校の錚々たる飛行家の飛行振りを見る事が出來るのみならず是非それまでに、自分も相當の準備した此飛行會に參加する事が出來るであらうと考へたからである。仍で早速飛行會の支配人に逢つて、兎に角自分の飛行機をも、此の晴れの舞臺に列せしむる事が出來たのであつた。

愈よ飛行會が始まつた。多くの飛行家は一樣にスミス君の飛行機を見て迚も飛べぬものだとして振向きもしなかつたが、唯だ人の注意せしめたものは、彼れが未だ十六歳の少年であるといふ事であつた。それでスミス君の過去の經歴や家庭の境遇などを知らない乍らも、幼ない此少年の勇氣を激賞した。

スミス君が始めて高空飛行を行るといふので、隨分な人氣であつたが、遂に此飛行に於ても、不幸にしてスミス君は墜落して車輪を破壞して了つた。其れを修理する金もない。アル君の發議に從つて、競馬場内でスミス式飛行機を觀覽させ、其入場料をとつて漸く三十一圓ばかりの金を得た。三十一圓！　それは甚だ少額の金ではあるが、スミ

ス君は飛行機を始めて以來は勿論の事、其以前と雖も決して之れ程纏まつた多額の金を儲け得た事がないのだ。スミス君にとつては實に之れ程貴いものはない。

此飛行會に於て、スミス君は更らに多くの飛行機に對する智識を得た。實際の飛行機を見たのも、本當の飛行家に面接したのも之れが始めてゞある。シカゴやセントルイスが當時に於ける米國飛行界の中心であることも知り。是非とも一度シカゴへ旅行することを思ひたつて三十一圓の金を旅費にし車輪をも此金で買ふ積りで、アル君と二人して出發した。貨物列車の中に二人して乘込んで辨當も食ふか食はずで生れて始めて遠出をするのであつた。大都會に着いてからも、都會特

有の貧民生活の中に混つて、ホテルは最下等の湯殿の地下室を選んで一日三十錢づゝを拂つた。

シカゴに遊んだ目的として、先づ第一にあらゆる飛行場、飛行學校等を見學し、數限りない新智識を得た。際涯もなく野心はムラ〳〵と燃ゆる許りで、先づべき金はない。二人は彼れ此れする間に滯在費もなくなつて、再び夜半シカゴの停車場を捜がし、其處に居つた浮浪人から、潛かに貨車の中に飛び乘る方法を敎はつて、早速其れに忍び込んで半夜だけは眠つた。間もなくして制動手に發見されて追出され、夜明けまで藁荷の中に潛り込んで寢た。散々苦勞をして三週間目で生れ故郷のフオート・ウエーンに歸つて來た。

スミス君が三週間の旅行をして歸つて來た時の服裝は、餘りに汚れて居た。母でさへ始めは玄關に浮浪人が立つて居ると思つた。けれども其れが眞の我子であることを知つた時に、兩親はどれ程喜んだ事であらう。交る〳〵抱きついて接吻した。

旅行中の出來事や、飛行機に就ての話で、食事は賑やかに濟まされた。

『お父さん、僕の飛行機を完全に直すには四百圓餘りの金が費るのです。誰れか世間で貸してくれるやうな人はありますまいかね』

とスミス君が言つた時に、父は我子の此志を滿足させる事が出來な

い自分を責めるやうに、感慨無量の面持ちをして居られた。

其後スミス君は足を棒にして資金調達運動をやつたが、それ等は悉く失敗に終つた。スミス君の父は飽くまで氣丈夫な人であつた。武士は食はねど高楊枝といふ。いま此スミス君の父は、赤貧洗ふが如き此の窮境にあり乍ら、

『アートや、吾々はいま此地所に對して四百圓の金を借りる事が出來る。それをお前に遣らう』

『――』

『お前の知つての通り、吾々は及ぶ限りお前を助けると言つたのだ』

スミス君は、何か言はうとしたが聲が出ない。唯だ漸くの事で、

『お父さん、どうか其お金を私の爲めに九十日間だけ借りて下さい、――それまでには屹度返す事を誓ひます』

と言つた。スミス君は眞に立派な兩親を有つた事を、心中何れ程誇りとしたであらう。

其後直ぐにスミス君は、アル君と相携へて、再び天幕生活にかへり九十日間には必ず大なる成功を得て、父母を慰めねばならず、又サイエンテフイツク、アメリカンの賞金も獲得しなければならぬと考へて殆んど不眠不休で工事を急ぎ、練習を始めた。彼れ程戀しくて一時も忘れられないエミー嬢の所へも、薩張り行かずに勉強した。それは決してエミー嬢が惡るく思はないと言ふ事を知つて安心して居るからで

あつた。

九十日の期限も剩す所一個月と云ふ時になつて、漸く飛行機は出來上り、早速練習を開始して、六日目の日には前後十二回に亘つて、立派なる直線飛行が出來た。仍て直ちに其處から六哩許り隔てゝある二ユウ・ヘヴン市まで野外飛行を決行するといふ事を發表すると、さあ世間の人が俄かに騒ぎ出した。新聞社の人などが自働車で飛行機の後を追ふなどいふ事を計劃した。

其日スミス君は、「福の神」だといつて可愛いゝ一疋の小猫を籠に入れて出發した。もう大分操縦術にも馴れたので、機は輕く地面を離れ快い風を顔に受けながら、喝采する人々の頭の上を眞一文字に飛ん

で、其儘にニー・ヘヴン市に向つた。其時の高度は約五百呎であつた。

すると俄然！　發動機が停まつた。背中で籠の中の小猫が死物苦しみの聲を出して居るのが解つた。機上のスミス君は、自分は斯麼高空へ上つたのは此れが始めであつて、而かも空中滑翔の經驗もない。空中滑翔の理屈は知らぬでもないが、其危急な場合に、よく其翼の角度を知る事が容易でなかつたが、幸にして沈着なる頭腦をスミス君は有つて居たので、遂に其儘事もなく着陸することが出來た。

人々は皆な墮落だと思つた。又其れが當然である。エミー孃も驚いて、通信員の自働車へ乘せて貰つて走せて來るし、忽ちの間に眞黑山の見物人に包まれて了つた。背中にあつた小猫は、可愛想にも、放熱

器の連結管が破れ、熱湯が流れ出して小猫を苦しめて居るのであつた。其故障はマグネトーの破損に起因して居た事が解り。自働車の道具を借りて早速修理して無事に曲馬場の後に飛び歸つた。

スミス君は、此時ばかり、始めて生みの母親が泣くのを見た。母は感喜して固く〳〵スミスを抱きしめ、涙をハラ〳〵と落して泣いた。群衆も之れを見て貰ひ泣きしたのであつた。長い間の苦勞も漸く茲に成功の曙光を認める事が出來たのだと思つて、スミス君も感喜の涙に咽んだ。

■■此町の誇であります■■

發動機の故障で途中で着陸はしたが、處女飛行としては申分のない飛行であつた。人々は深くスミス君に同情し、帽子を脱いで金を集め五十六圓の金をスミス君に與へた。スミス君は飛行によつて金を得たのは、之れが抑も第一回目である。

九十日と決めて借りた四百圓の金の期限は、もう二週間の後に逼つて居るので、早速フオート・ウエーンの公園で興行飛行をやる事を考へた所が、之れも非常に市民の同情によつて、種々なる便宜を得た。

此頃ではもう人々は、

『貴君の如うな少年の有るのは、此の町の誇りであります』

といつてくれるやうになつた。餘りの人氣に煽られて、興行飛行の日

取前に、少し無謀な飛行を演つて、期日間際に飛行機を破壊したりして、大分弱らせられたが、エミー嬢の激勵やら、公園の支配人などの厚意で、どうやら期日までに修理を終つたが、思へば飛行日取二日間を置いて其翌日は、借金の期限であつた。天氣が相憎く惡くても、群衆は一向無頓着で集まつて來た。大抵の人は飛行家の胸中の苦しみを知らないのだ。

秋はもう此の天地に訪れて、朝夕の寒さも佳成り酷しく、風も時々荒々しく吹き立てゝ來た。二時頃までにはもう切符も數百枚賣れて、六百圓ばかりの入場料が入つて居る。少し此天氣には無理だとは思つたが、慊々なから飛行機を天幕から曳出して遂々出發した。五十呎

ばかりの低空で競馬場を一週したが、斯麼低空では觀衆が滿足しないのは知つて居る。追々と上舵を引いて行くと、突然氣流の渦卷に出喰はした。左に傾いたと思つたら右に傾き、前後にも酷く搖れて殆んど操縱の自由を失つて、小舟に乘つて大海を行くやうに搖られ〳〵に遂に横樣に墜落し始めた。

其瞬間！　機上のスミス君はもう全く駄目だと感念して居た。神の助げか、全身に力をこめて狂氣の如く風と戰つて、魔の力は何時か遠く遁げ去つて、地上約二十呎の所で機は水平に返つて野原の中に着陸した。

群衆の中に混つて母もエミー嬢も馳けつけた。眼の不自由な父も、

出來る丈け早く、喘ぎ〳〵驅けつけた。けれども其時母はスミス君の頭に抱きついて、其儘氣絶して了つて居た。皆んな急いで母を天幕の中に進れて行つて、漸くの事で蘇生させた。群衆の熱した嗄れ聲が、時々スミス君の耳朶を破らんばかりに高く聞えた。

飛行會第一日は斯うして未だ嘗て味はつた事のない苦い經驗をなめたが、觀衆は滿足して、喝采して返つた。二日目も二回の小飛行を行つて、先づ無事に終了し、目出度く一千百七十九圓の收入があつた。そして又目出度く父の爲めに四百圓も銀行に返却し、大に富豪になつたやうな心持ちで、暫らく家庭も賑やかにやる事が出來た。

スミス君は、其金を持つて、之れまでに時々小金を借してくれた人達を訪問して、返せる丈けを返して廻はつて、兩親にも必要なだけの分を渡し、剩る金で機體の修理材料を紐育へ注文してやると、もう殘るのは四、五圓になつて了つた。

■初めて興業飛行の契約■

『アル君！　君も隨分僕の爲めに苦勞してくれたネ』

といつて、スミス君は四五圓の殘金をアル君に遣らうとしたら、アル君は受取らなかつた。

『それでも、君は僕の爲めに著物を悉り臺なしにして了つたから、責めて洋袴でも一著買つて上げませう』

と言つて兩人して下町を歩いてヅボンを買つた。友達といふものは持つべきもの、スミス君に對して、彼れ程骨を折つて來たアル君も、今までにスミス君から返禮として受けたものは、何ともかとも此のヅボン一着ばかりであつた。

スミス君とアル君と二人にとつて最も紀念すべき苦勞の多かつた十六歳の年は、先づ之れ位で暮れて行つた。スミス君も、間斷なき危惧の感念を兩親に持たせて置くに忍びないで、一先づ飛行界から隱れて氣を拔かうと考へた。それは其他にいろ〳〵の理由もあるが、先づ冬期中は天氣が概して惡い。責めて飛行機でも完全であればいゝと思ふが、其れも佳成り長い間の惡戰苦鬪で、發動機、機體ともに弱はつて

居る。此際英氣を十分に養つて、來春になつたら更らに大飛躍を試みようと考へたのだ。然しさういふて遊んで居る譯にも行かないので、前の通りウエザーハツグ君の建築事務所に通つて、幾分かでも自分の生活費を得ようとした。

其頃に突然スミス君を訪ねて來た人があつた。それは先頃のスミス君の飛行振りを噂に聞いて、シカゴのミルス飛行會社から來たので、此冬テキサスに於ける興行飛行の契約を結びに來た。出來得べくんばミルス飛行會社と一個年間の契約をして貰ひたいといふので、其金高も隨分多きなものであつた。

久方振りで、其日エミー嬢を訪問すると、それは佳成り寒い日だつ

たので、エミー嬢のお父さんのコーア氏も、嬢の妹達ちも、皆な一所にストーブを圍んで遊んで居た。エミー嬢のお父さんは、日頃からスミス君を嫌つて居るといふので、スミス君も直ぐ歸らうかと思つたがコーア氏は今日は何故か非常に上機嫌で、いろ〳〵面白い話をした末に、

『アートさん、貴君は今多くの友達から好かれて居る。が然し貴君の仕事の飛行機は、莫迦々々しいものだと皆んなが言つて居る。飛行機など止めて建築業にお返りなさい。そうすれば貴君は此町に立派な家を建てゝ、澤山のお金を有つ事が出來ますよ』

と言つた。コーア氏がスミス君を嫌ふのは、飛行機乘りだからと云ふ

意味で、若しそれを止めれは、嬢エミーとの結婚も許してやるといふ意味であることが解つた。

スミス君は、心の中でいまに御覽なさいと言ふ考があるので、斯麽事に就て一々エミー嬢のお父さんと口論したくなかつたので、エミー嬢と二人切りで話しする閑もなく、直ぐ樣吾が家に歸つて、父とも相談の上、ミルス飛行會社の契約に署名した。

テキサス飛行の契約は、第一回がベー・シチーで第二回はブライアンと言ふ所であつた。スミス君は若し此のテキサスの飛行で十分金が儲かつたら、エミー嬢のお父さんも屹度飛行機乘りを然う〳〵けなさなくなるであらう。又エミー嬢との仲も、喜んで許してくれるだらう

と考へた。其の外に猶ほ兩親を更らに安逸にして上げなければならぬといふ大きな責任があるのであつた。

ベー・シチーの飛行で十分のお金が得られたら、エミー嬢にも許嫁指輪を買つてやらうと言つたら、エミー嬢は、今の苦しい場合に、然う云ふ物を戴きたくないと言つたが、内心は甚だ慾しさうであつた。

ベー・シチーの飛行會は、謝肉祭を當て込んでの興行であつたが、其土地の人々は、未だ嘗て飛行機を見た事もなく、隨分不謹愼な觀衆で弱らせられ、僅か二分間許りの小飛行で終はつて了つた。天候が惡いのと、發動機の力がないのと、機脚を破壞した等の原因で、碌な飛行も出來なかつた。修繕して期日を繰延べる事は、次ぎのブライアンの

契約もあるので、此處は全然之れで中止し、倉皇としてブライアンに逃げ去つた。

■觀衆の不平は潮の如う■

運の惡い時には、何處まで往つてもいゝ事はないもので、スミス君も散々ベー・シチーで味噌をつけて、更らにブライアンに來て見ると、沿道到る處に『少年飛行家アート・スミスといふ廣告のビラが出て居て、人氣は素晴しい。けれども、行つて見ると、飛行場の惡いので先づ落膽し、愈よ飛行する日になつて、天氣は猛烈に惡るく、無理に飛ばして五十呎ばかりの中空から、强風の爲めに叩き落されて、機體を

滅茶々々に破壞し、發動機を故鄕の停車場まで送るに足る位の小額の金を得たばかり、他に一物をも得ずして再び故山に還る事になつた。

ブライアン飛行會の興行人は、全然詐欺師であつて、觀衆から不平が潮の如うに起つた、スミス君もまご〳〵して居ると打ち殺さるぞといつて、酷く脅喝されて、呆々の態で歸つて來た。故鄕のフオート・ウエーン驛に瀘車が到着した時にも、スミス君は故更ら反對の側から飛び下り、人目を忍んで胡つ鼠り吾が家へ戻つた。それでも兩人の親達は、スミス君の飛行失敗に對して、毛筋ほども愚痴を溢さない許りか無事に歸つて來た顏を見て、死んだ兒供に逢つた時のやうに喜ばれた。そして急いで晩飯を調へて下さつた。父は此頃になつて益々眼が見え

なくなつて來て居たが、其麼事は一言も口へ出さずに、見えないものを强いて見ようとするやうにするのが、如何にも傷はしい事であつた。

『お前も體だけは丈夫にしてお呉れよ、金などは何時でも出來るものだ』

と言はれた。スミス君も心の中で、世の中に自分程善い親を有つたものはないと、深く神に感謝した。今度こそはと思ふから、金の調達に就ては、一言も强請りがましい事を言はなかつたが、父は

『又此地所を抵當にすれば金は出來よう』

と言つた。スミス君は、もう固く決心して此上親の心配をかけ度くないと考へて居るので、再び然う云ふ事はしたくない。今度こそは自分

の力で何うにかすると父に答へた。

翌くる日から、スミス君は日頃から自分の事業と云ふよりは、自分といふ此少年に興味を有つて居りさうな人々をば、片つ端から訪問して、一々資金調達の方法を御願ひして見たが、金となると誰一人として對手になつて呉れる人もなかつた。事業家を說いたり、飛行會社を起さうと言つて見たりしたが、悉く其勞力は失敗に歸し、逢ふ人毎に飛行機などは止めろと言ふのであつた。斯ういふ失意の境遇にある時は、自分に同情し、勇氣を附けてくれるものは、エミー孃より外には眞に一人も無かつた。

けれども、渡る世間に鬼はなし、スミス君は何時までもさうして埋

木で許りは居なかつた。或る日上院議員フレミング氏の事を思ひ出した。フレミング氏は此町でも重要な位置にあり、金滿家ではあり、遊獵好きで又競爭用自動車を有つて居て、なか〳〵のスポートマンらしい所がある。スミス君は極く賴りない一縷の望みを懷いてフレミング氏を其事務所に訪問し、逐一自分の境遇を訴へた。彼れは長い間默つてコツ〳〵と鉛筆で机をたゝいて居たが、遂にスミス君の言を承知して呉れた。そして其の方が又スミス君にとつて都合が宜からうと言ふので、契約を二個年も長くして千二百圓を借して呉れた。

スミス君は飛び立つばかりに悅んで、早速發動機を携へてシカゴに出た。今は身に殘る物は此の一個の發動機と千六百圓の借金ばかりで

ある。家を出る時も、スミス君は母にさへ語らなかつたが、自分は今度こそは父の眼を治療する丈けの金と、母にも更らに樂をさせる丈けの金を得ない間は、斷じて故郷の土を踏むまいと決心して居た。

シカゴに出てからは、ミルス飛行會社の厚意で其工場を無料で借りるし、又同會社の周旋でスターリング市の興行飛行會に契約をつけて貰ひ、其時始めて一著の新しい飛行服を買ふ丈けの餘裕もあり、其れを記念する爲めに寫眞を撮つて、之れを懷かしいエミー孃の所へ送つてやつた。自分がエミー孃に贈り物をしたのは、何んともかとも、之れが初めてであつた。此の新しい機體と新しい飛行服も僅か一日の後には、憐れや泥塗れの穢れたものになつて了つた。それはスターリン

グの飛行會で、發動機の力が弱く、强風に逢つて田圃の中へ叩落されて了つたのだ。

■禍福は綯へる繩の如し■

スターリング飛行會で得た金は僅かに百二十五圓四十錢ばかりで、辛つと修繕費位にかならない。續いて行つたイリノイ州のマツトーン飛行會でも、飛行機を破壞して僅かに五十四圓の收入、先づ此春ばかり不幸な事はないと思つて、毎日〳〵涙に暮れて居た。新しい發動機さへあればと思はぬ日は唯だの一日もないが、今では發動機どころか生活費にも差支へて居る。自分は何時になつたら、身に錦繡を纏ふて

故山の父母に見ゆる事が出來るであらうと、夜半人知れず暗涙に咽んだ事も、決して一度や二度ではない。

其六月になつて再びマツトーンの飛行會があつたが、着陸地が惡いのと天氣が惡いので、何うしても飛べない。觀客からは散々に罵倒され、飛行機を破壞されさうになつて、苦し紛れに飛んで又しても飛行機を破壞し、僅かに身を以て遁れ、僅か百圓ばかりの旅費を貰つてシカゴへ歸り、ミルス飛行會社の支配人を說いて、修理の材料を貰ひ、夜も碌々眠らずに働いて、飛行機の修理を濟まし、不完全な發動機の生命あらん限りを使つて、何うかして新發動機購入の途を構じた。

其後續いて催されたブレスフオードの飛行會では、十五分間の飛行

をするといふ契約であつたにも拘らず、辛との事で三分間飛んだ。其二日目にも無理に飛んで、空中で發動機が停まり、死苦みしみをして八分間の飛行を終へて着陸の際に機脚を折り、眞に傷々しい飛行を行つたが、無智な觀衆はそれでも非常に喝采した。スミス君はまあ多くて、百圓位の報酬であらうと思つたら、驚く勿れ千五百圓の大金が懷に這入つた。

千五百圓！　之れは飛行機を始めて以來、最も多額の儲けであつたスミス君は此の金を如何に使用したであらう。新發動機も買ひたい。エミー嬢に指環も買つて遣りたい。然う考へると、未だ此れ位の金は燒石に水位ゐのものであるかも知れぬが、親孝行なスミス君は、何は

ともあれ、父をシカゴに召んで、名醫の診察を受けさせる事にした。

父がシカゴに到着するのを待つて居る間に、スミス君にとつて更らに幸福な事が一つあつた。それはミルス會社へ新著したカーカム式の新發動機を、無理に社長に强請つて、エルクハートの飛行會にミルス飛行會社を代表して參加する爲めに、無理に借りる事を許可された事だ。それはスミス君が之れまで使ひ古した二衝程のものとは比べ物にならぬ四衝程式六氣筩の價格三千三百圓ばかりの立派なものであつた。發動機さへよかつたなら、屹度自分が之れまで味つたやうな不愉快なものではなく、飛行といふ事は隨分愉快な事であらうと考へて居た。スミス君も愈よ之れから運が向いて來たのだなと思つて、雀躍り

して悅んだ。

禍福は綯へる繩の如く、昨日いゝと思つた事も今日は惡く、スミス君も殆んど運命の神に飜弄されて、今日は非常に悲しむべき事に遭遇した。其れは折角父をシカゴまで召んで、シカゴ第一等の眼科醫の診察を受けた時に、醫者はスミス君に對つて言つた。

『アートさん、貴君のお父さんの眼は、もう施すべき方法が無くなつて居るのです』

と、噫！　何たる悲慘事ぞ。醫者はスミス君の孝心の屆かなかつた爲めではないと言つて、切りにスミス君を慰めてくれた。されど、あゝされども父の眼は永遠に盲目となり終つたのである。子たるものゝ何

うして之れを泣かずに居られよう。

『お前の母が獨りで淋しく待つて居る。儂は急いで歸るから――お前も精々體を大事にして――』

と言つて、氣丈夫な父も啜り泣きにないた。

野外横斷大飛行に成功

飛行家にとつて何に嬉しいといつて、發動機のいゝのを据付けた程愉快な事は決して他にない。譬へ何麼儲けづくの飛行であつても、飛行中に金錢の事などを考へる事は倒底出來ない。出來る丈け愉快な飛行がして見たいと切に希望する以外には恐らく何等の慾望もないも

のだ。

スミス君が新しい六十馬力のカーカム式發動機を据付けて初めてエルクハートで飛んだ時は、スミス君自身ですら、生れて以來最上の愉快を味つたと言つて居る。空中に於て約三十分間に亘つて、思ふ存分な飛行が出來て觀客をして十分に喝采せしめた許りでなく此時は自分の最も懷かしいエミー孃が、母と一緒に見に來てくれた事は、更らにスミス君にとつて最大の幸福であつた。

此處の飛行は二日とも大成功で、更らに一日の日延べを依頼された。スミス君は次ぎのアドリアンの飛行會もあるので、固く拒んだが聞かれず、遂々アドリアンへは此處から空中路でいく事にして、大喝采裡

に空中から『左樣なら』をしてアドリアンに到達した。兩市街の間は約五十哩であつた。スミス君にとつては、實に之れまでになき野外横斷大飛行であつた。

此時の人氣は又豫想以上であつて、ヒルスデール新聞社は飛行機に托して沿道へ新聞を撒布させた。平和の光に輝された沿道の村々や谷、河、山を横斷して、朗らか日光を翼にうけて、悠々として進み、五千呎の高空を飛んで無事にアドリアンに着陸した。

アドリアンに到着して見ると、其處にはもうミルス飛行會社の支配人が來て居て、自分の今使つて居る發動機に就て、直く樣相談を受けた。支配人は自分の爲めに、更らにダコタ州デツド・ウツド市の飛行

會の契約を持つて來た。その飛行會では、二千五百圓の報酬があるといふので、就ては現在の發動機を借用でなく全然貴君が買つて呉れるか、然もなければ、幾らの損料を出せといふのであつた。其損料が莫迦々々しく高いものであつたので、スミス君は兎も角第一回分として其場で千四百圓を支拂つて、先づ全然自分のものにして了つた。

現在のスミス君にとつての千四百圓は、決して容易なものでなかつたが、長い間の望みの一分が達せられると思つて、奮發して了つた。着陸する早々、金で窘められて不愉快であつたが、更らにアドリアンの飛行會が、毎日降り續く雨で、碌な飛行が出來ず、僅か百圓ばかりの收入で甘んじなければならぬ事になつた時には、スミス君は非常にガ

ッカリした。

デツド・ウツドの飛行會へも、直ぐ其足で往つたが、其土地の人が市長を始めとして重要な位置にある人が、寄つて集つて盛んに歓待してくれたのはいゝが、肝緊な飛行場が、四方山に圍まれた谷底のやうな所で、倒底飛行は出來ぬ所だつた。よく〳〵聞いて見ると、カーチス系の名飛行家が、二人までも此土地の飛行を拒んだことがあると聞いて、スミス君は更らに慄とした。

何うしても飛行は出來ぬと言つて斷ると、眞夜中まで市長等が騒いで自動車を飛ばして辛つとの事で着陸場を發見したのが、ブラツド・ヒルといふ之れも佳成り高い丘の上、四方が谷で更らに其外は山に圍

まれて居る。惡氣流の問屋とでも言ひたい所だつたが、強いての希望を拒み難く、遂々此處で飛んだが最後、空中で有りと有らゆる惡氣流と戰ひ、死苦しみをして、僅つた一回飛んだ。而かも着陸の際は、機上のスミス君は全く墜落の狀態にあつたが、地上十呎ばかりの所で、上昇氣流に打突つて、綿布團の上へ落されたやうに着陸した。觀衆はヤンヤと言ふて喝采した。スミス君は之れ程氣味の惡い喝采を聽いた事がないと言つた。

■最も得意な少年と成る■

斯んな死苦みをして飛んで居るのも、飛行機を見て居る人には解ら

ないと見えて、隨分無理な注文を矢繼早に申込んで來る。其翌日も又其翌日も飛んだ。雲の中へ飛び込んで無我夢中で着陸したり、殆んどあらゆる冒險をしたのであつたが、新發動機の十分なる力は、絶えずスミス君の困難を消すことが出來た。

愈よブラドヒルの飛行を終ると、此處の人は衷心スミス君の努力を買つて遣つた。そして賜るにドロヂアン鑛山から採掘した金鑛から製した名譽ある金メタルと、別に二千五百圓をスミス君に贈つた。其メタルには『ブラツドヒルにて飛べる最初の飛行家へ——デツドウツド市民より』と書いてあつた。

スミス君も此處では佳成り難飛行をした甲斐があつたので、其悦び

をエミー嬢へ知らせん爲めに、特製の銀の匙を贈物にしたり、新發動機の殘金を支拂つたりした。此街を後にして更らにアイオフ州のウエルマン市飛行會に赴く時にも、市民は多く停車場まで送つてくれた。

スミス君は胸中言ひ知れぬ滿足を覺えた。始めて飛行家らしい飛行家になり得た事やら、世間の子供と同樣に、自分も其情人に對して多少でも贈物が爲し得られるやうになつた事を此上なく滿足に思つた。

ウエルマン市の飛行を終へて、スミス君は始めて千二百圓を貯金し得た。其後カンサス・シチーでは三千呎の高空から、故意と發動機を停めて空中滑翔を行つて、思ひ切り觀衆の肝を拔き、續いて田舍町を限りなく飛廻はつて、毎も其都度五、六圓宛の貯金をした。金を得

る爲めには、其秋に擧行されたシカゴ飛行競爭の晴れの舞臺も犧牲にして、强いて目算の明らかなコーニングの飛行を受引けて千七百圓を嚢中に納めた。

想へば故山を出でゝより、はや既に一年餘り、老いませる盲目の父、君は如何にして日を送らるゝであらうかと考へて、急に歸りたくなつて、コーニングから西バジニアのミツドルバーンに行く途中、僅か二日間ばかりの餘日を利用して、久方振りで兩親に逢ふ事が出來た。

長い間の勞働と寂寥に苦しめられた揚句、故山の土を踏むのは樂しいものである。兩親とエミー孃とは、スミス君を停車場まで迎へてくれた。エミー孃はもういつの間にか少女では無くなつて居て、裾の長

い着物に、髪もチャンと結び上げて居た。其れを見た時のスミス君は唯だ譯もなくエミーと結婚しなければならぬと切に考へられた。

久敷い間の留守で、父も母も嬉しがつてスミス君の話に聞きとれて居た。賞金のことも、メタルの事も悉皆り話した。それを聞いて、母は又しても嬉し涙をボロ〳〵と溢された。

其晩スミス君はエミーを其家まで送つていつた。そして途すがら、此秋のバジニアの飛行が終へて歸つて來た時。兩人は結婚しようと言つて話した。其翌日はスミス君はフオート、ウエーンで一等立派な寶石屋で、一等上等な指環を四百圓程出して買つて、之れをエミーにやつた。狹い此の街中で、スミス君は最も得意な少年だと噂された。

■戀人エミー孃と初同乘■

スミス君の半生は、常に斯うして吾々に美しき情話を與へて居る。其の生活が如何に困窮で、如何に貧弱であつても、スミス君が十五歳の時から今日まで、過去五年間、いつも松の綠のやうに變らぬものはエミー孃との戀仲である。又父母を思ふ孝心である。そして又之れからのスミス君の生涯は、益々其愛情の色彩を增して來るばかりである。

バジニア州ミツドルバーンの飛行は、地形が前のデツドウツドと同樣に頗る嶮惡であつたのと、不幸にして發動機に故障があつた爲めに十分な飛行は出來なかつたが、それでも飛行機を見た事のない見物人

には、佳成りの感興を與へ、スミス君自身も二百圓ばかりの貯金を殖やして愈よ故郷の空に歸つて來た。

其れは眞に堂々たる名譽の歸郷であつた。飛行に對する多年の志も今は略ぼ成功の域に達し、貯金も佳成り多く出來た。いざこれからが故郷の空に雄飛して、大に多年研鑽の功を舊友知己に示すべき時期は來たのだ。恩惠を受けたフレミング氏の借金も利子をつけて返濟し、兩親には更めて贈物をし、エミーを自動車に乘せたり、芝居見物に連れて行つたり、他目の羨やましい生活を營むことが出來た。

仍て早速以前に世話になつた新聞社やら、公園支配人やらの援助によつて、茲に盛んなる御土產飛行を開催する事になつて、スミス君は

街の多くの子供達から、盛んに尊敬される。まさに得意の壇上にある時である。唯だ一つ此處に、スミス君を今猶ほ苦しめて居るのは、エミーの父のコーア氏が、何うしても兩人の結婚を許可して呉れぬ事であつた。

飛行第一日には、小供を同乘させる事になつて居たが、其場になつて其子供の姿が見えない。誰れか〳〵と物色したが、乘手が無い。其處へ、

『私が乘りませう』

と言つて飛出したのは、母と一緒に來て居つたエミーであつた。スミス君は遂々情人エミーと一緒に乘つた。觀衆の喝采は天地を撼かす

程であつた。飛行機は輕く地面を離れて、多數の人の頭上を悠々として飛んだ。何人か此の詩的飛行の感興にうたれぬものがあらう。機上の兩人の心持は果して何れ程樂しい事であらう。

五百呎計の空を思ふ存分に富んで、漸く着陸した時に、見物人の割れるやうな喝采の中から、突然エミーの父が現はれて、一言も言はずにエミーの手を取つて去つた。スミス君は、惡い事をしたとは思つたが、もう追附かない。

其晩早速エミーの家を訪問すると、エミーの父は火の如うに怒つて居た。

『でも兩人は既に結婚の約束をして居るのです』

『何に結婚！　飛んでもない事だ。貴君は歳は幾つです！　それにエミーも未だ子供です。飛行家の妻にするのにはまだ早いです』

と言つてきつぱり斷はられた。そして此の先き三年經つて、猶ほ飛行機乘りを斷念して來たらば結婚の相談にも預からうと言ふ事であつた。スミス君は始めから之れ位の事は有らうとは思ひながら、今更らの如く落膽した。

其翌日の第二回目は、スミス君にとつて最も尊き父君を同乘させて飛んだ、父も非常に悅んで、盲目でありながら飛行中機上で盛んに手を振つて、地上の喝采に答へたりした。着陸してからも、スミス君は未だ嘗て父が之れ程嬉しさうな顏をしたのを見たことがなかつた。

■飛行機でエミーと遁走■

二三日間はスミス君は物思ひに日を送つた。それはエミーの父の怒を如何にして和げんかといふ事を考へたのである。

或る夜晩く、切りに電話のベルが鳴つた。スミス君は父と母の眼りを騷がさぬやうに、急いで受話器を外して聞いた。それは戀しいエミーの聲であつた。

『アートさん、私は急に他所へやられる事になつたのです私どうしませう』

『何處へ！　何時！』

エミーの父は何うしてもスミス君と女との間を隔てやうとした。此の先三年の長い年月を、的もなく待つことは、二人の今の心持として迚も出來る事でなかつた。

『エミーさん、一緒に遁げませう――飛行機で』

と言つた時に、エミーも直ちに承知した。

翌日からスミス君は熱心に飛行機の手入れをし準備を終へてから、愈よ明日の朝と云ふ事をエミーに知らせた。兩人は此處から七十哩もある空中を飛んで、ミシガン州のヒルスデール迄落延びようと云ふ事に決めた。そして一刻も早く、兩親の許可がなければ結婚の出來ない此のインデアナ州の地外に出て、結婚の自由な所へ行かうといふので

あつた。

翌朝エミーは約束の時間通りにやつて來た。新しい着物で結婚したいからと言つて、別に一個の包み物を持つて來た。スミス君は之れを翼に結びつけ、エミーに赤いスウエーターを着せ、紐で裾をくゝり、愈よ兩人は機上の人となつて、脚下から鳥が立つように、人目の關を忍んで一蓮托生、空中の駈落ちを始めた。

小春日和の暖かい日であつた。機上は風も佳成り冷たいが、一度び地面を離れて、吾が住み馴れし街の上空を瞬く隙に飛越し、續く郊外の平和な村々を眺めつゝ、遠く北の空を目蒐けて飛ぶ時に、二人は浮世の凡ての苦勞を忘れて了つた。所が出發してから間もなく發動機に

故障が起つて、僅か十四哩ばかり來た所で、或る牧場に着陸し、昔馴染みのアル・ワートマン君を電話で呼んで、急いで修繕をして直ぐ樣飛び立つた。アル君はスミス君が方々を巡業して居る間に、可愛い妻君を娶つて、此の邊りに閑靜な生活をして居るのであつた。

スミス君とエミー嬢は、父が汽車で追かけて來ぬ中にと思つて、全速力でヒルスデール指して飛んで行つた。途中でジエーム湖を脚下に瞰下した。此處は前年スミス君が飛行研究を思ひ立つた所、其時と同じやうにあの角鷹が湖上を心持よささうに飛んでゐるのが見えた。スミス君はあれを見よと指した時に、エミーも嬉しさうに笑つて居た。

目的地は刻々に近づいて來た。そして其街の東の方に湖水があるこ

とを、スミス君は前年此地で飛行した經驗があるのでよく知つて居た。今漸くそれが見えた。そして機首を其方向に向けようと思つて、操縱把を廻さうとした時に、始めて補助翼が利かなくなつて居るのに氣が附いた。スミス君は驚いて、種々機上で考へて見たが、それは此の補助翼の操縱線が、破れた滑車に喰込んで居るのだと解つたが、最早や何とも施すべき術はなかつた。幾分下梶を取つて、下降し乍ら着陸地點を捜したが、漸く安定は妨げられて危險は瞬一瞬に近づいて來た。

スミス君は死物狂ひになつて操縱した。下には適當な野原も見えたが、機の方向は決して思ふ樣にならない。機は次第に箭の如き速力を以て、或る柔かい砂地に着陸した。其瞬間滑走車輪は地中に埋もれて

機は轉覆し、憐れや二人は其場に氣絶して了つたのである。

■墜落して結婚を許さる■

四時間ばかり經つて、漸く氣がついた時に、スミス君はエミーは何うしたと尋ねた。

それは或る貧しいホテルの一室であつた。氣が附いてから種々考へて見たが、墜落してから今迄の事は一つとして明確した記憶が無かつた。そして其處に居るのは、先刻途中で着陸した時に逢つたアル君であつた。アル君は狂氣の如うになつて居たが、

『アート君！　僕が解るか？　エミーさんは大丈夫だから安心しろ』

と言つてくれた。自分は今頭から足まで繃帶に卷かれて、寢臺の上に横はつて居るのだ。エミーは屹度死んだのだらうか、人々がそれを隱して居るのだと思つて、生きて居るなら逢はせてくれろと賴んだが、容易に聽いてくれない。

『連れて行かれなければ、獨りで歩いて行く』

と固く言ひ張つたので、附添の人が搖椅子に乘せて、エミーの寢て居る部屋へ押して行つた。

エミーも其時氣が附いては居たが、殆んど生きた色もなく、顏は蒼白く、唇の色も無くなつてゐた。スミス君が入つて來たのを見て、

『オ、、アートさん、貴君も——！』

と言ひ乍ら手を出さうとした時に、兩人の寢臺が衝突した。其響で又二人は氣絶して了つた。

一時間許りたつて、又漸くスミス君が氣が附いた時には、エミー孃も已に氣が附いて、そして其處には牧師が來て居た。人々の力を籍りて兩人は固く手を握り、吾々の結婚の爲めに牧師は聖書を朗讀して居た。あゝ遂に二人の切なる希望はかなつて、結婚する事が出來たのだ。至つて不鮮明な意識の中にも、二人は此の事ばかりは確然りと意識する事が出來た。二人は何處なに嬉しかつたであらう。

其處へエミーの父のコーア氏と、スミス君の母とが這入つて來た。何れも唯だ默つて居た。すると、

『お父さん、吾々は結婚しました、何うぞお恕し下さい』と言つて泣き出した。スミス君も、スミス君の母も、彼女が泣いたのを見たのは之れが初めてゞあつた。

間もなく二人は部屋を別々にされたが、スミス君は斯う考へた。エミーは確かに生きて居る。そして吾々は結婚したのだ。有らゆる妨害と困難にうち勝つ事が出來たのだ。之れ以上嬉しい事はないと。そこで安心して保養をする事が出來たのであるが、此の片田舍のヒルデールには、病院もなければ、良醫もない。スミス君は三週間許りしてから、杖に捉つて歩く事が出來たが、エミーは未だ起きる事が出來なかつた。一日も早く回復させる爲めに、エミーを小寢臺に乘せて、二人

の故郷フオート・ウエーンに歸つて來た。

恰度此時分の事だ、フオート・ウエーンの町の人は、スミス君の此の立派な飛行家としての成功を祝せん爲めに據金して、ダイヤモンド入りの飛行機のついた金メタルをスミス君に贈つた。スミス君が之れを受取つたのは、街で一等立派なテンプル劇場であつたが、當日の街は此の成功せる少年飛行家の爲めに、且つ又フオート・ウエーンの唯一の誇りの爲めに、到る處歡樂の聲に滿たされた。之れはスミス君にとつて最も貴重なるメタルである。

スミス君が、宙返り飛行を思ひついたのも、恰度此頃からの事であるが、驅落をした時の飛行機は、もう役に立たぬ程に壞れて居たし、

貯金も大分減つたし、何にはともあれと、急いで飛行機を新調して、貯金を作る爲めに、第二回の興行飛行の發途についた。そして今度は最愛の妻としてエミーを携へて歩く事が出來た。

■堂々たる初回宙返飛行■

スミス君が諸々方々に巡業飛行をして居る間に、彼のリンカーン・ビーチーが、米國に於ける第一回の宙返り飛行に成功したことを知つて、スミス君の日頃の野心はむら〳〵と胸底に湧き立つた。けれども宙返り飛行をやることに就ては、未だ最愛のエミーすらも贊成してくれなかつた。

『其麼に貴郎は宙返りがやりたいのですか？――そして宙返りは安全なものだといふ確信をお有ちですか』

と聞かれた時に、スミス君は言下に

『確信があるッ』

と答へた。

『貴郎は、いつでも出來るとお仰つた事は、悉く成功して居ります、其麼に逆轉飛行がお望みなら私も賛成しませう』

といつて言つた。其時分漸く又貯金も相當に出來たので、二人は急いで故郷に歸り、直ぐ樣宙返り用の飛行機の製作を始め、其年の五月に漸く試乘をしようとした時に、米國に於ける第二回の宙返り飛行成功

者たるソムプソンといふ飛行家が、恰度此處を通過して飛行會を催しスミス君も初めて實際の宙返り飛行を見た。スミス君の飛行機をソムプソンが見て、

『斯麼飛行機で飛べるものか』

と言つて大に罵倒した。其際恰度推進器に故障があつたので、飛んで見せてやる事が出來なかつたが、ソムプソンが去つた一週間ほど後に遂々スミス君は自家考案の飛行機を飛ばして、二千呎の高空で堂々第一回の逆轉飛行に成功する事が出來た。

言ふ迄もなく其評判は、米國全土を動かした。啻だに米國のみではない。幼き二十歳の少年飛行家は、茲に於て愈よ世界的飛行家として

名聲を天下に轟かしたのである。

■勿驚連續逆轉二十二回■

スミス君が宙返飛行を志した動機は、絶對に飛行の安全を證明する爲めだと云ふのだ。そして宙返飛行のあらゆる原理を解くには、單に決心、勞力、忍耐など許りでは駄目である。其上に十分の思考を要する。仍て先づ第一に尾翼の拖の構造に就て苦心した　それは普通飛行機のものゝ約二倍のもので、主翼と尾翼との間隔も、普通のものより三呎ばかり遠く取つけた。又逆轉した瞬間に於て、非常なる壓力に堪へられるように、各部分とも普通のものよりも二倍も重く、且つ堅牢

に製作した。

第一回の試驗に際して、機は思つたよりも以上輕く地を離れ、ズン〳〵と大空に舞ひ昇つた。眞一天には一塊の雲が幾つもあつたが、スミス君は其雲の間を飛び拔けて、三千呎の高空に昇つた時に、煌々した日光を兩翼に浴びて、低空で味へない程の快味があつた。脚下の雲は絹のやうな光澤があつた。

『いまこそ逆轉の好機よ』と機上のスミス君は獨言を言つて、軈て强くハンドルを押した。機は垂直になつて落下し始め、今度は猛烈にハンドルを引くと、再び兩翼に空氣を捕へて水平飛行にかへつた。斯ういふ事を繰り返して三度までやつた。言ふ迄もなくスミス君の此第一

回の宙返りは、未だ完全なる輪を描き得たものではなかつた。けれども後に到つて完全なる輪を描き得るやうになつた時にも、スミス君の此の當初の考は、正さに原野の正しいものであつた。

第一回の此冒險飛行は、世間の人は誰れも知らなかつたが、唯だ一人妻のエミーだけが見て居つた。スミス君が着陸した時に、エミー夫人は、宛で小羊のやうにして抱き附いた。飛行家としては、エミー夫人の如うな快活な妻を有つことは、眞に此上ない幸福であらう。其後二人は諸々方々を相携へて、到る處で此種の逆轉飛行をやり、技術は次第〳〵に神境に進んだ。米國飛行界に於て、最も優秀なる飛行家と稱された彼のビーチーが、不幸桑港埠頭の露と消えてからは、世人は

又と之れ以上の曲藝を桑港博覽會に於て見る事は出來まいと思つた。而かも突如として現はれた此のインデアナ州生れのアート・スミス君が、更らに其れ以上の狂亂的逆轉を演つて見せるといふことを發表した時に、人々は非常に驚異の眼を瞠いた。而かも其れが僅か二十歳の青年であるといふに至つては、更らに一層人の好奇心を唆らない譯にはゆかぬ。

スミス君は先づ其の試驗飛行として一回の火花仕掛の夜間飛行と、二十餘回の晝間飛行とを演つて、茲に大博覽會當事者との契約を結び一週間四回の飛行で四千圓宛の報酬を得たのである。其鮮やかなる逆轉はビーチー以上の興味を以て迎へられた。特に空中に於ける連續逆

轉二十二回といふ世界宙返り飛行のレコードを作つた一事を以てしても、如何に其飛行の大膽なるかを伺ふ事が出來る。スミス君自身が稱して言ふ所の、所謂狂亂飛行などに到つて、到底人間の仕事とも思はれぬものである。

スミスは、眞に米國飛行界に於ける唯一人の名少年飛行家となつた桑港博覽會場に於ける最近の彼れの勇敢なる飛行振りは、既に餘りに事新しく人口に膾炙されて居る事と思ふ。

其れでも彼れスミス君自身は、飛行界に於ける自分の仕事も、漸く之れで端緒についたのだと言つて居る。彼れは何處まで此の空界を完全に征服しようとして居るのであらう。又常に彼れは人に語つて曰ふ

『吾々は、世人が曲乘飛行に關して、誤つた考を有つて居る事を云ひたい。人々は吾々を見て、唯だの輕業師だと思ひ、何等の故障で死んで了ふ迄は、命がけの冒險を行つて居るのだと。

然し乍ら吾々は決して其麼ものではない。否な寧ろ、飛行界に於ける本當の事業は、吾々によつて行はれて居るのだ。吾々は飛行の絕對に安全なることを證明すべく努力して居るのだ。世の凡てのレコード其れが果して何んだ。距離、高度、速力等のレコードを破る事は、飛行機が眞に安全にして、且つ實用的のものである事が證明された曉の仕事である。二萬六千呎の高空レコードを作つたり、一時間百四十哩の强大速力を出し得たりする事も、百尺か二百尺の低

空から墜落慘死する事があるとしたならば、其れ等のレコードは恐らく無意味である』

と、何と其言の壯んなる事ではあるまいか。吾々は切に此天才飛行家の幸福なる將來を祈るのである。

勇敢なれよ、アート・スミス君。

——(終)——

大正五年三月二十一日印刷
大正五年三月二十四日發行

定價金拾六錢

東京府豐多摩郡澁谷町字下澁谷町六一四番地
編者兼發行人　渡部一英
東京市麹町區飯田町二丁目三十三四番地
印刷人　押谷長松
東京市麹町區飯田町二丁目三十三四番地
印刷所　株式會社　兵林館印刷工場

不許複製

發行所　振替貯金口座東京三二〇四二番
國民飛行會
電話番町五二一九番

月刊 國民飛行

▼毎號□婦人欄□少年欄の設け有り▲

本誌は陸軍中將長岡外史閣下の會長たる國民飛行會の機關にして、記事の正確を旨とし萬人向きを標榜せる我國唯一の家庭飛行雜誌であります。

内容は毎號趣味に富み實益多き材料を選び通俗に書いたものを以て滿されて居ります。

▼本誌は國民飛行會の機關雜誌なり▲

全國到る處の書店に在り

（定價一部金六十錢・郵送料一部金壹錢）

D78
600

終